

2 地質時代

舞鶴のヒトの歴史、“舞鶴のあゆみ”はどこからはじめたらいいのでしょうか。ヒトはどこからここへきたのか。それともつぜん、ふってわいたのか……。私たちがすすんでいる舞鶴の土地は、気の遠くなるような昔からの記憶を記録しています。

峠の切りとおしの地層は、海の底であったことを語りかけ、がけの岩石の中には、2億年も前の海底の生物がとじこめられています。山が火を吹き、海がわき立った時代のものがたりも、私たちの立っている大地は、ゆたかに話しかけてくれます。

舞鶴は、日本列島を斜めによぎる構造帯に、舞鶴帯と名づけられるほど、さまざまな土地の動きを経験し、地層、岩石、化石の宝庫として、多くの資料をもっているゆたかな地域です。

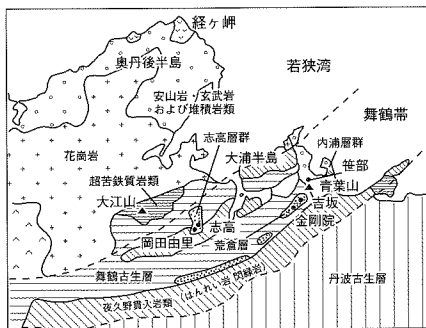
“舞鶴のあゆみ”は、ヒトの足音が、いずれどこかから聞こえてくるまで、まずは大地のささやきに、耳をすますことから始めましょう。

地質時代の舞鶴

化石は、人類が誕生する以前、地球上に生きてきた植物や動物などが、海や湖の底に沈んだあとすぐに砂や泥に埋もれてできたもので、岩石や鉱物とともに地球のおいたちや生物の進化のあとをたどることのできる貴重なものです。

「舞鶴帯」

私たちの住む舞鶴は、西日本を北東から南西に貫く「舞鶴帯」という構造帯の端に位置しています。古生代の終り頃、海は北方から次第に陸化しはじめ、海と陸との境目となった舞鶴帯は、その後も活発な地形変動により、舞鶴層群・志高層群・荒倉層群・難波江層群・内浦層群など、古生代から新生代にわたる化石が分布する地域となりました。



舞鶴周辺の地質



漣 痕

日本最古の石炭層

大正のころから第2次世界大戦にかけて、吉坂や志高には無煙炭を掘っていた炭鉱がありました。炭鉱跡に落ちている石炭を観察すると、シダ類をはじめ、イチョウやソテツなどの裸子植物の化石が含まれていました。

5千年前にできた日本を代表する北海道などの石炭層に比べて2億年前にできた志高層群は日本最古の石炭層といわれています。

アンモナイトのいた浅い海

鹿原にある荒倉層では、アンモナイトの化石や二枚貝、巻貝の化石が出土します。また、漣痕化石とも呼ばれるリップルマーク（波の化石）を見ることが出来ます。岡田由里れんこんの採石場でも日本最大で最古（2億5000万年前）のリップルマークがあります。リップルマークは日本でも珍しいものです。

由良石

宮津市由良の奈具海岸や瀬崎の博奕岬にみられる花崗岩は、古来「由良石」とよばれて、墓石や田辺城の石垣に利用されてきました。この由良石ができたのは、恐竜が栄えていた中生代白亜紀（約7千万年前）のことです。

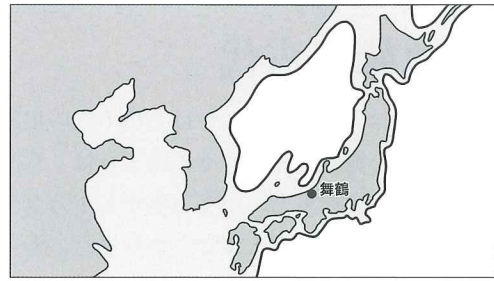
日本海の誕生

新生代になると、日本列島付近は、新たな変動期を迎えました。フォッサマグナとよばれる、新潟県糸魚川―静岡にかけての、大火山地帯が活発化して大きな割れ目ができ、現在の日本海側を中心に数百mもの大陥没が、あちこちで起きて日本海が生まれはじめたのです。海底火山から噴出した大量の火山灰は、高浜町難波江、日引付近のグリーンタフ（緑色凝灰岩）地帯をつくりました。この変動をグリーンタフ変動といい、弓なりに曲がった火山列島の基礎はこの時できました。中世以降、神社等で利用された「日引石」はこのグリーンタフからできています。

冠島や丹後半島の木子からは、約1,500万年前のタブ、ニレ、ハンノキといった広葉樹の化石が多くみられますが、これらはこの頃の陥没でできた湖の底に堆積したものです。



ビカリア（笹部）



大陸と地続きだったころの日本列島

ビカリアの発見

昭和50年の夏、青葉山北西部の笹部でゴルフ場を造成中、ビカリア カロッサ ジャポニカ (*Vicarya callosa japonica*) と呼ばれる巻貝の化石が数多く発見され、世界で最も美しいといわれるビカリア化石として注目をあつめました。ビカリアは、新生代第三紀中新世（約1500万年前）に生息していた巻貝で、この時期をしめす示準化石（しじゅん かせき）となっています。出土した地層は内浦層群とよばれ、舞鶴市と高浜町との中間地点にあたります。ビカリアの子孫は、現在でもフィリピン付近の海にいることから、当時の舞鶴は亜熱帯気候だったことがわかります。

青葉山の噴火

1千数百万年前には、青葉山の近くで海底火山が爆発しました。これは古青葉山とされています。そして現在の青葉山は溶岩ドームのように盛り上がり出来たものです。現在も麓の各所に残る溶岩塊は往時の姿をよみがえらせてくれます。この頃、若狭湾一帯は沈降し、美しいリアス式の海岸線が出来上がり、舞鶴湾が誕生したのです。



青葉山